

第3章

アルバイト・金銭感覚・おしゃれ

1. アルバイト

『モノグラフ・高校生』vol. 34（高校生たちのアルバイト体験）には、1992年6月を中心に首都圏1都3県の公立高校の2年生を対象としたアルバイトに関する調査がある。全体の29.6%が現在アルバイトをしていると答えている。今回の調査は、'96年7月、入学したての1年も含めた全学年を対象としたものであったが、現在「アルバイトをしている」と答えた生徒は全体で3.4%にすぎない。2年生だけをみても4.5%である。

前回はバブル崩壊後とはいえ、世をあげてお金儲け的な風調が蔓延していたときであり、今回は長引く経済停滞の中で極めて高い失業率が問題になっているときの調査ではあった。そうだとすると、なぜ2つのデータに大きな違いが出たのだろうか。前回は首都圏の公立高校を高校間格差で分けて、4年制大学進学希望率8割以上のA、1～6割のB、その他のCと3段階を幅広く調査したのに対し、今回の調査は地方の高校を対象としており、4年制大学志望率は73.7%であった。すなわち、前回調査のAグループに匹敵する。しかし、

前回A（上位校）のアルバイト率は、男子25.6%、女子33.6%である。こうしてみると今回の低率の原因は、進学校だからという理由ではなく地域的なこと、あるいは学校自体の特色といえそうである。

今回の調査で現在「アルバイトをしている」と答えている生徒の実数は67人と極めて少ないが、その特色をさぐってみたい。表3-1は、成績別にみたものである。わずかな違いながら、成績的には中間層にバイト率が低く、上位者と中の下位・下位者に多い傾向がある。成績上位者は週あたり5日以上が75.0%を占めるが、1回あたりの働く時間は2時間以内が50.0%であるのに対し、成績中の下位者は週あたり1日か2日が55.0%である。1回あたりの働く時間は長く、4時間以上が55.0%である。

表3-2は部活動別にまとめたものである。部活動に「以前は入っていたが、今はやっていない」生徒のアルバイト率が5.9%で比較的多い点が注目できる。表3-3は進路別のデータである。就職希望者の10.0%が他より

多い。

表3-4は今回の調査と'94年5月から7月の『モノグラフ・高校生』vol.43(高校生の性とデート)の東京・埼玉の公立高校生調査を比較したものである。'94年調査に比べると、男女ともに今回の調査のアルバイトが収入的にも低いことがわかる。アルバイトに関しては禁止している学校が多く、なかなか実数値をつかめないことを考慮しても、今回調査の学校ではアルバイトをしている生徒数も少なく、またやっているアルバイトも、そ

う高収入を得られるものではないことがわかった。アルバイトの目的については、次の金銭感覚の検討の中にゆずる。

今日、一般的には高校生のアルバイトはごく普通の現象になりつつある。東京都教育委員会が'95年5月に全日制都立高生約2万3千人を対象とした調査(都教育委員会指導部「生活指導研究協議会資料 平成7年度版」)によると、前年4月から8月までにアルバイトをした生徒は全体の40.3%を占める。アルバイトをした生徒のうち夏季休業日が68.8%、

表3-1 アルバイト × 成績——成績中位者は少ない

		アルバイト をしている	1週あたり				1回あたり		
			5日以上	3~4日	1~2日	不定期	2時間以内	2~4時間	4時間以上
全体		3.4	22.5	15.5	40.9	21.1	16.2	33.8	50.0
成績	上の方	4.4	75.0	0.0	25.0	0.0	50.0	25.0	25.0
	中の上	2.4	11.1	22.2	55.6	11.1	33.3	44.5	22.2
	中	2.4	15.0	15.0	45.0	25.0	12.5	50.0	37.5
	中の下	4.9	15.0	10.0	55.0	20.0	10.0	35.0	55.0
	下の方	4.0	40.0	13.3	20.0	26.7	6.7	20.0	73.3

表3-2 アルバイト × 部活動——部活動をやめている生徒に多い

運動部で熱心	2.8
運動部で不熱心	3.4
文化部で熱心	2.4
文化部で不熱心	1.1
以前入っていた	5.9
入ったことがない	2.3
その他	4.1

アルバイトを「している」割合

表3-3 アルバイト × 進路——大学進学志望者は少ない

超難関+難関4年制大学	1.8
普通+やさしい4年制大学	2.5
短大	5.6
専修・専門学校	5.0
就職	10.0

アルバイトを「している」割合

授業期間が57.6%、その他の休日が47.2%となる。生徒側にこのような実態があるのに、学校側はアルバイトを禁止、あるいは許可・届出制にしているのが普通である。

同調査によると、長期休業中のアルバイトを、やむを得ない場合を除いて原則禁止とする学校が69.7%、許可・届出制が19.0%である。また普通の授業のある期間のアルバイトは、原則禁止が64.5%、届出制が21.8%となっている。この数値は'93年調査より高くなり、学校側の対応がより厳しくなった傾向を読み取ることができる。

授業が終わった後などで、生徒から「お疲れさまでした」「お先に失礼します」などというアルバイト先の口調と思われる、聞き慣れぬあいさつを受けることがしばしばある。個人面談をやっている、別に担任に隠す気もなく「私、バイトで忙しい」などと明るく話されることも多い。また、保護者会でも「学校は生徒のアルバイトを積極的に認めたらどうか」といった主旨の発言が保護者側から出るようになってきている。

高校の現場にいと、生徒のアルバイトに関してはいろいろな事例を知ることになる。アルバイト先の間人間関係がよくて大学進学後もずっと続けた例、進学をやめてバイト先に職人さんとして就職し、やがて自立した例、礼儀を覚えた、責任感が出てきた、よい社会勉強をしてきた、自立的になった等々。また

逆に、学業の妨げ、非行に連なる、遅刻・早退・欠席が多くなった、学校をやめてしまった、拜金主義的、享乐的指向等、悪しき例も多い。「何も今、わずかなお金のために貴重な時間をバイトに費やさなくても」と思うことも多い。

やるべきことがはっきりしていて当てにされ、はつらつと時間を過ごし、やればやっただけお金になるアルバイトは学校生活にない魅力を持っている。それだけに学校生活との両立が難しい面も確実に持っている。そこで学校側としてはアルバイト禁止の規制をする。しかし、こうしたアルバイトの問題は基本的には学校の抱え込む問題ではなく家庭の問題であり、生徒個人の問題である。学校が生徒の全生活を掌握し指導下に置く時代から、本人に任せる部分、家庭に任せる部分、社会に任せる部分、学校が担当すべき部分と、それぞれの守備範囲や役割を見直すべき時代になっている。

アルバイトに関しても、本来は学校が禁止したり許可を与えたりするのではなく、本人や家庭に任せていくべきだと考える。そう考えると同時に、生徒本人たちには、ことアルバイトだけでなく、日頃からもっと自立的な思考や行動がとれることがアルバイトと学校の両立を図る上で必要であるし、また家庭やアルバイト先も含めたおとな社会には、日頃から子どもたちを未熟なものとして利用する

表3-4 アルバイト収入(1か月) × 性——'94年調査との比較

		(%)					
		5千円未満	5千円～ 1万円未満	1万円～ 1万5千円 未満	1万5千円～ 2万円未満	2万円～ 3万円未満	3万円以上
男 子	今回	9.8	17.1	4.9	0.0	26.7	41.5
	'94年	4.0	6.0	8.1	8.1	15.4	58.4
女 子	今回	3.1	12.5	12.5	21.9	31.3	18.7
	'94年	2.6	5.7	11.3	8.7	30.4	41.3

とか、半人前扱いをするというのではなく、次世代を社会のみんなで育てる意識で接する必要があるように思う。

とはいっても、これらの条件に乏しいのが現状である。したがって、本人の問題、学校とは関係ない家庭の問題と、理想論ばかり口

にするわけにはいかないのである。アルバイトをしようとする生徒には「何の目的でやるのか、どんな生活ルールで勉強との両立をはかるのか、この2点を事前にしっかり考えなさい」とアドバイスせざるを得ないのである。

2. 金銭感覚

(1) お小遣い

表3-5によると、1か月のお小遣いの額については、「5千～1万円未満」が男子

51.0%、女子46.2%と約半数を占めるが、「1万円以上」も男子13.1%、女子8.2%いる。

『モノグラフ・高校生』vol.43（高校生の性とデート）で、'94年5月から7月に東京

表3-5 お小遣い(1か月) × 性・部活動——女子より男子、文化部より運動部に多い

		もらって いない	5千円未満	5千円～ 7千円未満	7千円～ 1万円未満	1万円以上
全体		11.2	29.5	37.3	11.3	10.7
性別	男子	10.4	25.5	37.6	13.4	13.1
	女子	12.1	33.5	37.0	9.2	8.2
部活動	運動部	9.5	28.1	39.4	11.7	11.3
	文化部	12.4	35.9	34.5	10.6	6.6
	以前入っていた	11.9	22.4	36.8	14.4	14.5
	入ったことがない	14.9	35.3	35.3	6.3	8.2
	その他	2.0	38.0	38.0	10.0	12.0

運動部・文化部ともに「熱心」+「不熱心」の割合

と埼玉15校の公立高校で行った調査と比較したものが図3-1である。両調査ともに、ほぼ同じ形を示している。男女ともに「5千円～7千円未満」の層が最も多くなっている。'94年の東京・埼玉の数値と比較すると男子はほとんど変わらないものの、女子は今回の地方の高校生は「もらっていない～7千円未満」が82.6%であるのに対し、'94年の女子は72.8%と、首都圏の女子高校生がより多くもらっていることがわかる。

図3-2は、学年別にグラフにまとめたものである。1年生では、「もらっていない」が10.8%、「5千円未満」が39.6%である。

合わせて50.4%がこの層を形成する。2年生ではこの層は35.5%となり、「5千円～1万円未満」層が52.3%となる。また「1万円以上」もらう生徒は1年生の7.0%が、2年生では12.2%と増える。3年生は2年生とほぼ同じ構成比率であるが、「5千円～7千円未満」層が減り、「もらっていない」層が13.1%と、他学年より3%ほど増えている。その背景には3年生は受験中心型となり、今まで部活動などで定期的にお小遣いが必要だったものが不必要となり、不定期化することが考えられる。

図3-3はアルバイトをしているか否かで

図3-1 '94年調査とお小遣いの比較 × 性——首都圏の高校生がより多い

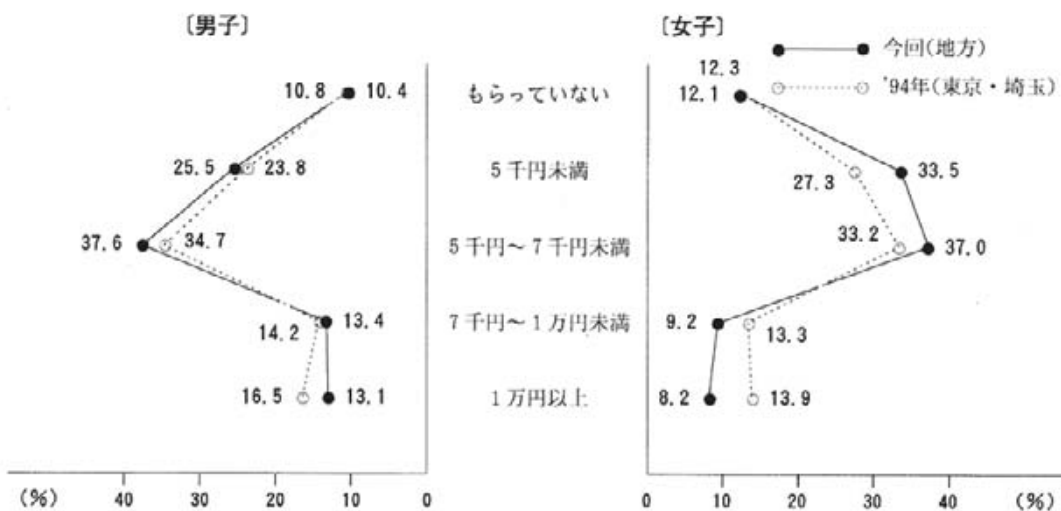
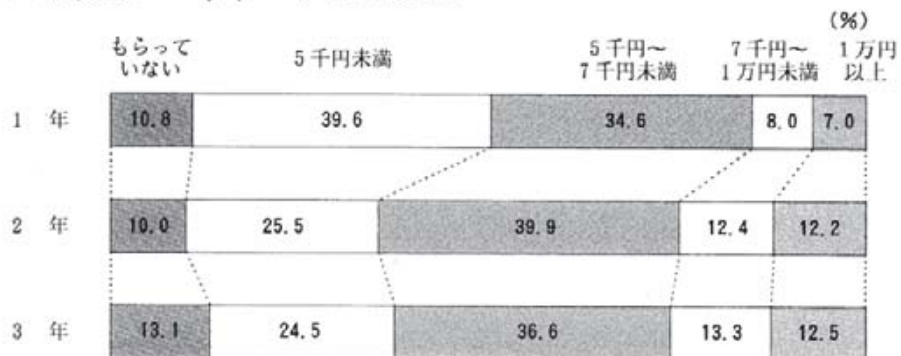


図3-2 お小遣い × 学年——学年進行で増額



まとめたものである。アルバイトしている者は、「もらっていない」が31.2%と多い。アルバイトをしているからもらっていないのか、逆にもらっていないからアルバイトをするのかはわからない。また、「1万円以上」もらっている者が15.0%と多い点も注目できる。

先掲の表3-5によると、運動部は文化部より一般に多くもらっている傾向がある。また部活動に「入ったことがない」者はお小遣いが少なく、「もらっていない」が14.9%いる。

表3-6の進路別では、短大志望者が「5千円未満」36.5%と他に比べ多い比率となり、「1万円以上」が6.2%である。専修・専門学校

志望者は「1万円以上」が16.0%と最も多い。

生徒に対し、お小遣いに関する調査をやってみると、どこまでがお小遣いかという質問が出る。食費を含めたり交通費を含めて考える者もいる一方、まったく好きにできるお年玉をイメージする者もいる。たしかにその点があいまいなまま、調査してきたきらいがあるが、こうした質問が出る背景には、お小遣いに対する意識の変化もあるように思う。月々親から定額をもらい、その中でやりくりしていくのではなく、必要に応じて親から随時お金をもらっているようである。一般に家計が豊かになり少子化が進む中で、親が子ども

図3-3 お小遣い × アルバイト—アルバイトするのはもらっていないから？

	(%)				
	もらっていない	5千円未満	5千円～7千円未満	7千円～1万円未満	1万円以上
全体	11.2	29.5	37.3	11.3	10.7
アルバイトをしている	31.2	16.4	28.4	9.0	15.0
アルバイトをしていない	10.6	29.9	37.6	11.4	10.5

表3-6 お小遣い × 進路—専門学校志望に多い「1万円以上」

	(%)				
	もらっていない	5千円未満	5千円～7千円未満	7千円～1万円未満	1万円以上
全体	11.2	29.5	37.3	11.3	10.7
超難関+難関4年制大学	13.0	27.8	36.9	11.3	11.0
普通+やさしい4年制大学	8.4	30.3	38.8	12.1	10.4
短大	13.5	36.5	35.4	8.4	6.2
専修・専門学校	11.5	26.5	36.5	9.5	16.0
就職	16.0	32.0	30.0	16.0	6.0

もの金銭的要求に随時応じられるようになって
いるのであろう。

(2) お金の使い方

図3-4は、自分のお金を使う場合を男女
別にまとめたものである。男女ともに雑誌や
マンガ、趣味のもの、CDのレンタル料・購
入といったことに対しては約80%前後が「全

部自分のお金」、あるいは「わりと自分のお
金」を使うと答える。勉強に関連した参考書
やノートに対しては男女ともに20%前後しか
自分のお金を使わない。逆に、男女差が明確な
ものは洋服などファッション関係で男子44.8
%に対し、女子は34.8%である。

図3-4 お金の使い方 × 性—趣味的なことには自分のお金

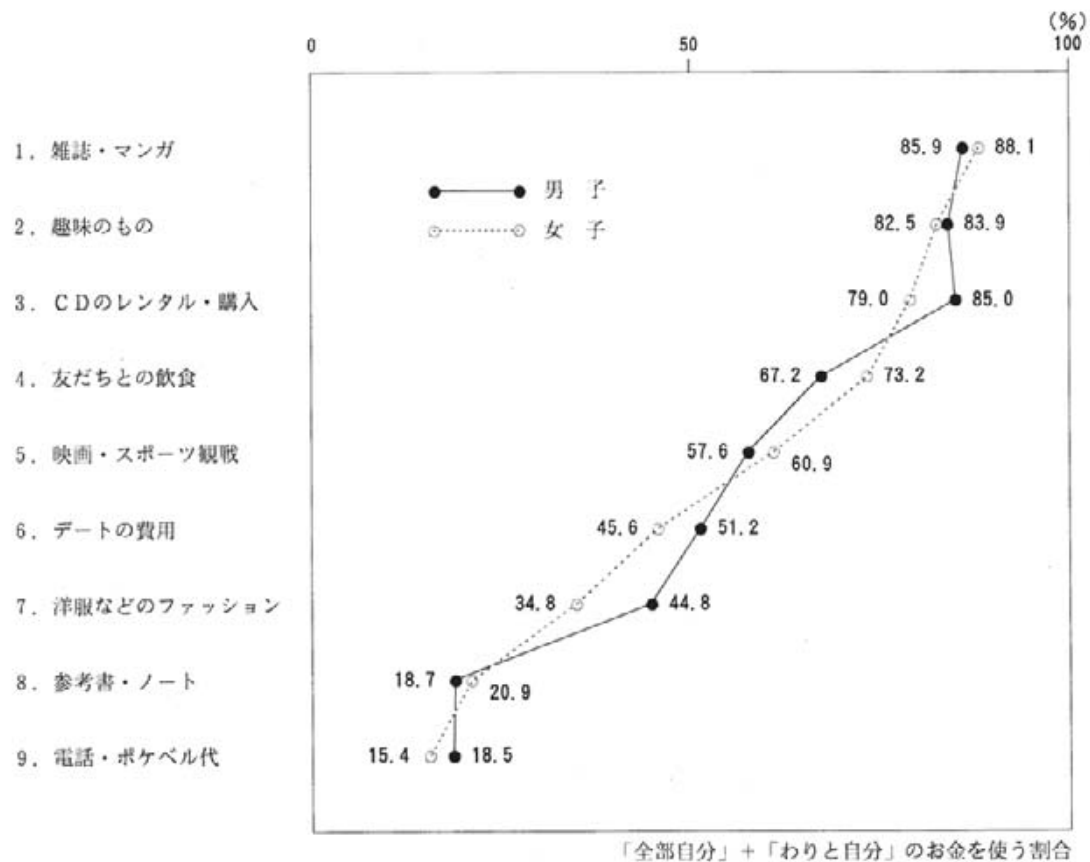


表3-7は学年別にまとめたものである。7つの項目で、学年進行に応じて自分のお金を使う率が高くなる。1年と3年の数値に最も開きがあるものは、洋服などファッション関係で、1年の33.9%に対し3年では46.0%となっている。

図3-5は、アルバイトをしているか否かからまとめたものである。雑誌・マンガ、趣

味、CDなどに関してはアルバイトをしているか否かで大きな差異はみられないが、アルバイトをしている生徒は、おしゃれや友だちとのつきあいのためにアルバイトをしてお小遣いの不足分を補っているといえそうである。

前述のお小遣いとお金の使い方のデータを合わせてみると、お小遣いを定期的にもらわず、必要に応じて親からもらう構図と同じも

表3-7 お金の使い方 × 学年——大半が学年進行で拡大

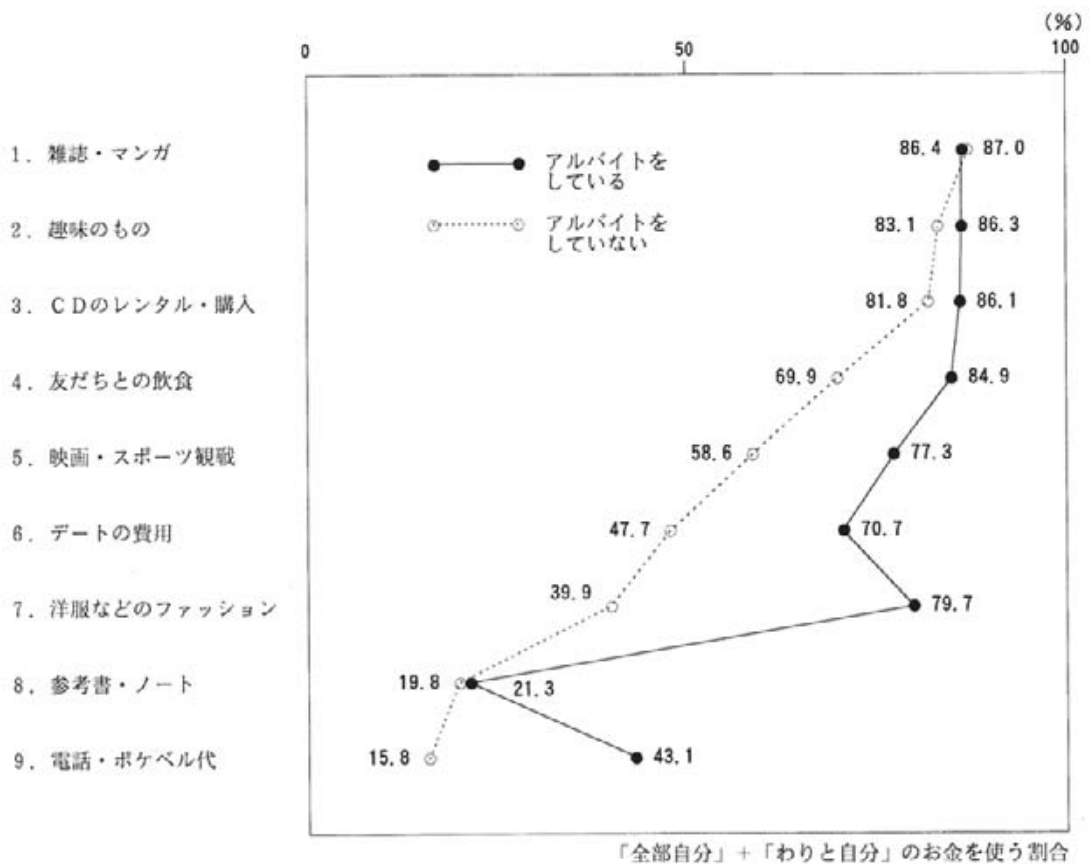
	(%)		
	1 年	2 年	3 年
1. 雑誌・マンガ	87.8	> 86.0	< 87.6
2. 趣味のもの	80.9	83.5	85.0
3. CDのレンタル・購入	79.9	81.6	84.8
4. 友だちとの飲食	67.4	70.7	72.6
5. 映画・スポーツ観戦	51.7	61.8	63.6
6. デートの費用	44.4	47.6	53.5
7. 洋服などのファッション	33.9	39.8	46.0
8. 参考書・ノート	17.5	18.0	24.6
9. 電話・ポケベル代	16.8	> 14.8	< 19.8

「全部自分」+「わりと自分」のお金を使う割合
○は最大値

のを読み取れる。すなわち、自分の趣味などあまり値のはらないものには、自分のお小遣いを使う者が8割を占めるが、臨時にお金のかかる友人との飲食やデート費用になると6割から7割となり、自分のお金を使う率は下がる。もっと値のはる洋服などファッションになると約4割となり、さらに勉強関係とも

なるとたった2割にも満たないものとなり、親がかりの傾向が強くなる。お小遣いの授受を通して子どもの行動をつかむことができる。子どもの数が少なく親子関係が友だち化していたり、あるいはまったく逆に金銭的なつながりだけになっているなど、親側にも「親がかり」を受け入れる要素が強いように思う。

図3-5 お金の使い方 × アルバイト — アルバイトをしている者は遊び、おしゃれに使う



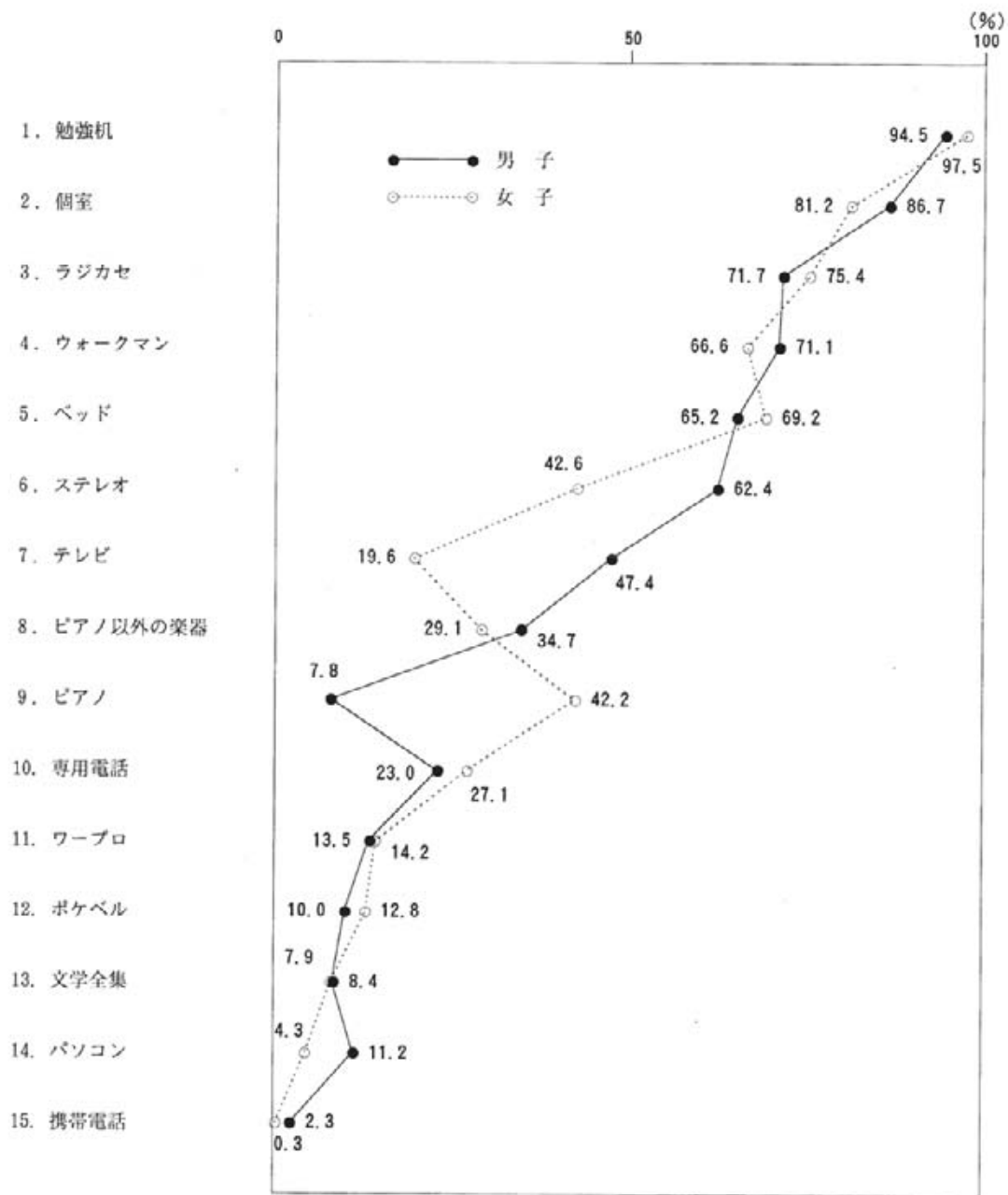
3. 持ち物とおしゃれ

(1) 個人所有のもの

図3-6は男女比較をしたものである。勉

強機、個室、ラジカセ、ウォークマン、ベッドを個人で持っている者は、男女ほぼ同じ比率で多い。男子はステレオ62.4%、テレビ

図3-6 個人所有のもの × 性——男子はより個人的なもの



47.4%であるが、女子はステレオ42.6%、テレビ19.6%と差が出た。約半数の男子がテレビを個人で持っていると答えているが、テレビの所有が学年進行でわずかしか伸びていないこと（表3-8）からすれば、中学以前からのテレビゲームで所有したものではなかろうか。それは、ピアノが女子42.2%に対し、男子7.8%であることと対比できる。

表3-8は学年別にまとめたものである。学年進行で増加するものには個室、ウォークマン、ステレオ、専用電話がある。とりわけ個室は1年80.4%が2年84.1%、3年で87.5%と増える。ラジカセは逆に学年進行で減少する。これはステレオやウォークマンの増加と表裏の関係にある。専用電話は子機も含めたものである。首都圏の高校生と接している

表3-8 個人所有のもの × 学年——個室所有は学年進行で増加

(%)

	全 体	1 年	2 年	3 年
1. 勉強机	96.0	96.6	96.8	94.3
2. 個室	84.0	80.4 <	84.1 <	87.5
3. ラジカセ	73.5	75.6 >	72.9 >	72.3
4. ウォークマン	68.8	65.5 <	67.2 <	74.3
5. ベッド	67.2	66.6	69.6	64.8
6. ステレオ	52.5	49.3 <	52.6 <	55.6
7. テレビ	33.4	32.1	33.5	34.7
8. ピアノ以外の楽器	31.9	27.8	34.8	32.4
9. ピアノ	25.1	26.0	26.4	22.5
10. 専用電話	25.0	22.4 <	25.2 <	27.5
11. ワークプロ	13.9	13.6	14.4	13.5
12. ポケベル	11.4	9.7	12.1	12.4
13. 文学全集	8.1	9.0	9.1	6.0
14. パソコン	7.8	7.5	8.2	7.5
15. 携帯電話	1.3	1.3	1.1	1.7

感覚からすると、ワープロ、パソコン、さらにはポケベルの所有率は思ったより少なかった。

表3-9はアルバイトをしているか否かでまとめたものである。アルバイトをしている生徒が、そうではない者に対し10%以上多く所有しているものは、ステレオ、テレビ、ピ

アノ以外の楽器、専用電話、ポケベルである。また逆に、アルバイトしていない生徒が10%多くなったものは勉強机である。アルバイトをしている生徒は、趣味的な要素の強いステレオや楽器をより多く所有し、友だちとの連絡に専用電話（子機を含む）やポケベルを持ちたがっている。

表3-9 個人所有のもの × アルバイト—アルバイト代の使い方 (%)

	アルバイトをしている	アルバイトをしていない
1. 勉強机	85.1	95.5
2. 個室	86.6	83.2
3. ラジカセ	70.1	73.0
4. ウォークマン	77.6	67.8
5. ベッド	62.7	66.6
6. ステレオ	65.7	51.4
7. テレビ	52.2	32.5
8. ピアノ以外の楽器	43.3	31.1
9. ピアノ	32.8	24.7
10. 専用電話	43.3	24.1
11. ワープロ	17.9	13.6
12. ポケベル	40.3	10.2
13. 文学全集	13.4	7.9
14. パソコン	13.4	7.5
15. 携帯電話	10.4	1.0

○は10%以上の開きのあるもの

(2) 毎日学校へ持っていくもの

表3-10は、毎日学校へ持っていくものを男女別にまとめたものである。女子が男子を50%以上上回っているものに、リップクリーム、ヘアブラシ、鏡があり、10%以上上回るものにお弁当、テレホンカード、筆入れ、香

水・コロン、時計がある。表3-11は同じ調査の比較的多い12項目を学年別にまとめたものである、教科書、かばん、お弁当は学年進行と逆に減る。とりわけお弁当は1年の80.8%が2年73.0%、3年69.1%となる。進学校にふさわしく参考書の所持率が高いものと予測したが、意外に少なかった。

表3-10 毎日学校に持っていくもの × 性—女子は身だしなみ

	全 体	男 子		女 子
1. 教科書・ノート	94.2	92.0	<	96.5
2. かばん	93.3	90.6	<	96.1
3. 筆入れ	90.4	84.4	<	96.4
4. テレホンカード	81.4	74.2	<	88.6
5. お弁当	74.2	65.2	<	83.2
6. 時計	70.5	65.0	<	75.9
7. 鏡	51.0	24.0	<	77.8
8. ヘアブラシ	43.1	13.6	<	72.3
9. リップクリーム	40.1	9.1	<	70.8
10. ガム・あめ	25.4	20.9	<	29.8
11. 参考書	24.5	25.4	>	23.6
12. ウォークマン	14.6	18.7	>	10.5
13. 香水・コロン	11.1	5.2	<	16.9
14. ポケベル	10.2	7.9	<	12.4
15. キャッシュカード	8.9	8.6		9.3
16. 口紅	5.9	1.0	<	10.8
17. 化粧品	5.8	1.1	<	10.4
18. 小説・文庫本	4.0	4.1		4.0
19. マンガ・雑誌	3.6	4.4		2.8
20. タバコ	1.6	3.1		0.0
21. トランプ・花札	1.1	1.8		0.3

○は10%以上の開きのあるもの

表3-12は12項目を成績別にまとめたものである。中間層が教科書やかばん、筆入れ、テレホンカードなど、いわば基本的なものを学校に持っていく傾向がある。上位者ではお弁当を持ってくる率81.1%、また少ない数値ながら参考書の28.9%も目立つ。それに対し、中位以下の生徒で目立つものは、鏡、ヘアブラシ、リップクリームなどの身の回りのものである。

首都圏の高校では授業中にポケベルが鳴ったとか、遅刻の届けを友人間のポケベルを使って担任に連絡してくる等の話をよく聞く。また通学途中の電車の中で、マンガや雑誌を読んでいる姿をよく見かける。さらに「中学までは禁止されていたが高校になって自由に

持ってこられる」などという感想を聞くことの多いガムやあめ、こうしたものの学校持参率が今回極めて低かった。「不要なものを持ってこない」とする指導がきちんとなされている学校だといえる。

(3) おしゃれ

高校卒業後1、2年たった頃、文化祭などで久々に母校にやってきた卒業生が決まったように言うせりふがある。「今の高校生はおしゃれだ」「なんだか偉そうに見える」などだが、偉そうか否かはともかく、おしゃれになったのは同感である。この10年くらいの間に高校生の制服はずいぶん変わったデザインのものに変わってきた。また、様々な映像や

表3-11 毎日学校に持っていくもの × 学年—お弁当持参は減少

	(%)			
	全 体	1 年	2 年	3 年
1. 教科書・ノート	94.2	95.4 >	95.0 >	92.0
2. かばん	93.3	94.0 >	93.3 >	92.7
3. 筆入れ	90.4	89.1	93.2	88.2
4. テレホンカード	81.4	81.6	82.6	79.9
5. お弁当	74.2	80.8 >	73.0 >	69.1
6. 時計	70.5	79.3	64.0	69.7
7. 鏡	51.0	49.6	51.3	52.1
8. ヘアブラシ	43.1	45.2	42.3	41.9
9. リップクリーム	40.1	38.2	41.1	40.8
10. ガム・あめ	25.4	26.3	26.0	23.6
11. 参考書	24.5	25.0	21.1	28.3
12. ウォークマン	14.6	12.2	15.1	16.3

情報誌などを通して若者ファッションが街中で幅を利かしている。

『モノグラフ・高校生』vol.35（高校生たちのおしゃれ）は'91年秋に東京・広島・愛媛の普通科公立高校生を対象に調査したものである。おしゃれ度を自己評価して、「とてもおしゃれ」「かなりおしゃれ」と答えた生徒は合わせて5.8%、「あまりおしゃれではない」「まったくおしゃれではない」と答えた合計は57.0%いた。今回の調査結果を表3-13にまとめた。「おしゃれである」と自己評価している者は7.0%、「おしゃれではない」が60.4%とほぼ同じような数値となった。

表3-14は朝シャンをするかについてまとめたものである。朝シャンを「毎日している」者は全体で8.8%、女子6.1%に対し男子は11.5%である。'91年の調査では今回と問

い方がやや違うものの、毎朝シャンプーするかの問いに対して「とても・かなりあてはまる」は全体で31.7%、男子32.4%、女子31.0%であった。両者の違いは地域性、学校差も多少影響していると思うが、高校生たちの朝シャンが新聞などでとりあげられ、その後過度なシャンプーは髪を痛める等の警告がなされるようになって、朝シャンをする生徒が減ってきたことにも影響されているように思われる。

表3-15は、してみたいおしゃれについて男女別、学年別にまとめたものである。7項目の中でずり下げズボン（ズリパン）以外は女子の数値が男子を上回った。学年別では、1年生の茶髪願望が52.7%、2年生では茶髪44.4%と人気ブランドのファッションが44.8%、3年生では茶髪、ブランドファッション

表3-12 毎日学校に持っていくもの × 成績——成績上位者はお弁当・参考書

	上の方	中の上	中	中の下	下の方
1. 教科書・ノート	88.9	96.5	95.9	94.9	89.7
2. かばん	91.1	94.9	92.4	96.1	90.8
3. 筆入れ	88.9	92.4	91.1	91.3	87.3
4. テレホンカード	77.8	84.1	83.3	81.8	77.8
5. お弁当	81.1	75.1	76.4	73.8	68.6
6. 時計	71.1	67.6	70.5	71.4	71.5
7. 鏡	34.4	50.8	55.6	55.3	41.7
8. ヘアブラシ	36.7	40.8	45.0	49.8	35.1
9. リップクリーム	40.0	43.2	44.3	41.3	29.8
10. ガム・あめ	22.2	24.9	26.2	25.7	24.5
11. 参考書	28.9	21.9	25.2	25.2	23.5
12. ウォークマン	15.6	13.0	14.2	14.6	17.9

○は最大値

に加えピアス・リングが43.7%と40%台の仲間入りをする。さらにパーマが1年生の17.3%、2年生の22.5%に対して31.7%と急増す

る。逸脱的なおしゃれ願望から、おとなびたおしゃれを望むようになる現れである。

表3-13 おしゃれ度の自己評価 × 性・学年——多くの生徒はおしゃれではない

(%)						
	全体	男子	女子	1年	2年	3年
とても+かなりおしゃれ	7.0	8.0	6.1	9.5	5.6	6.6
あまり+ぜんぜんおしゃれでない	60.4	64.8	55.8	55.2	64.3	60.3

表3-14 朝シャン × 性・学年——女子より男子に多い

(%)						
	全体	男子	女子	1年	2年	3年
毎日している	8.8	11.5	6.1	8.0	9.0	9.3
1日おきくらいにする	3.7	4.2	3.2	4.6	2.9	3.8
たまにする	34.3	32.6	36.0	38.0	31.7	33.9
ぜんぜんしない	53.2	51.7	54.7	49.4	56.4	53.0

表3-15 してみたいおしゃれ × 性・学年——1年茶髪、2年ブランド、3年パーマ

(%)						
	全体	男子	女子	1年	2年	3年
1. 茶髪	46.9	42.1	51.7	52.7	44.4	44.2
2. 人気ブランドのファッション	42.7	38.3	47.0	41.8	44.8	40.9
3. ピアス・リング	41.6	25.5	57.6	45.4	37.0	43.7
4. パーマ	23.8	9.3	38.1	17.3	22.5	31.7
5. 口紅・アイシャドー	20.3	3.8	36.2	21.2	17.5	22.8
6. ズリパン	8.6	12.3	4.8	11.5	7.3	7.1
7. ヘそ出しルック	6.7	5.5	7.6	7.3	6.4	6.2

「とても」+「わりと」したい割合

図3-7はアルバイトをしているか否かからまとめたものである。今までに検討してきたように、アルバイトをする1つの目的におしゃれがあることを裏付けるものとなった。

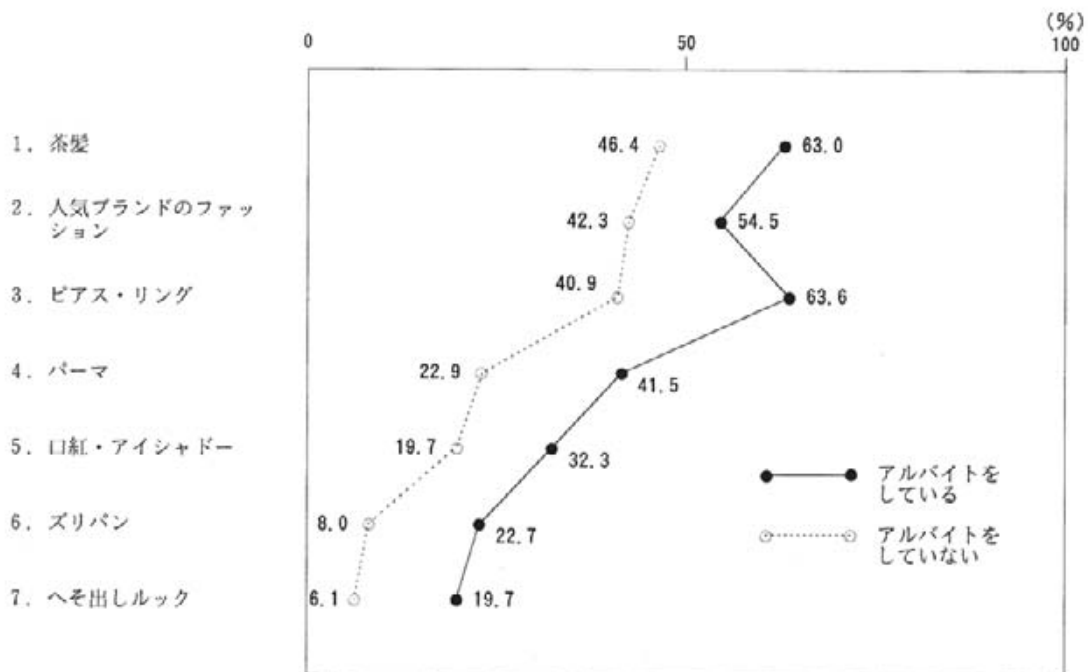
どの項目もアルバイトをしている生徒はしていない生徒よりも10%以上高い願望を示しているが、特にピアス・リング、パーマはほぼ2割の差が開いた。

日頃、制服のない学校で生徒の服装などを見ていると、1年入学当時は中学までの制服生活の反動からか、やたらに派手であったり、ちぐはぐな取り合わせであったりと珍妙なおしゃれをみかけるが、1年生の終わりあたりから、いろいろやってみる冒険の時代は終わり、それなりに落ち着いたさりげないものになる。制服のある学校でも、靴下の色を替えてみたり、シャツやブラウスのボタンの糸の色を替えてみたり、校門を出てからスカート

の丈をたくし上げてみたりと、制服の規制とおしゃれの間で涙ぐましい努力をしている姿をみかける。おしゃれな生徒が多いと評判になるような学校もある。

おしゃれは生徒にとって個性化の問題でありながら、実は「みんながやっている」という雰囲気があれば大胆にはやれないものでもある。今回の調査対象の生徒は第4章の図4-2の逸脱経験にも示されるように、学校の禁止する服装や、ヘアスタイルで登校するかに対し、「何度もある」10.5%、「ときどきある」12.3%と合わせても22.8%にすぎない。すなわち、多くの生徒にとっては、おしゃれを試みたい願望はあっても、それを実行するまでには至っていない。せいぜい着こなしの工夫や身だしなみをよくしたり、清潔に保つ程度にとどまっている。

図3-7 してみたいおしゃれ × アルバイト — アルバイトをしている生徒は積極的



第 4 章

高校生の規範意識の 変化と社会とのかかわり

最近の高校生を見ていると、安室奈美恵の姿をまねたアムラーや茶髪が増加してきている。また、薬物乱用が高校生の間にも見受けられることやテレクラを利用する女子高校生が増えていることも事実である。しかし、一部マスコミの恰好の取材対象となっている、渋谷や原宿を徘徊しているコギャルやその男友だちの言動・生態が、現代の高校生一般を代表しているとはとても思えない。服装を含め生徒の自主性をかなり認めている学校の教員の話の聞くと、へそ出しルックやずり下げパンツもいるが、彼らは必ずしもクラスの生徒たちに好意的に受け入れられているとはいえないという。

一方で、自転車通学をしている生徒たちの通学時の猛スピードや信号無視が増加してい

るので、一緒に歩いている小学生たちの危険も考えて、近隣の方がみかねて注意すると、無視したり、「うるせえ、この爺」などと暴言をはく者がいるという。また、試食用に外に出してある物を買う気もないのに大量に食べるだけの生徒が目立っているので注意してほしいという苦情が、近隣の商店から寄せられるようになったという。

ここ数年、筆者自身の経験も含めて、一般的な高校生の品位を疑うような言動や規範意識の欠落が気になりだしていた。そこで本章では、高校生がどのような逸脱行為を経験しているか、どのような生徒がどのような行為を容認しているかなどの実態を調査することによって、規範意識の変化とその背景を探ってみたい。

1. 盗難と飲酒・喫煙

多くの高校で生活指導上の重要課題となっているのが、校舎内の盗難事件の処理と、学校行事や部活動にかかわる飲酒や校舎内および近隣での喫煙事件であろう。これらの状況が地方の高校でどうなっているのだろうか、気になるところである。

そこで、まず盗難経験の有無を問うたのが図4-1である。全体では、27.7%と約3割の者が盗難経験があることがわかる。盗難が頻発したので昨年11月に調査した、東京のある公立高校では、約4割であった。この数値に比べると確かに少ないが、今回の調査が1

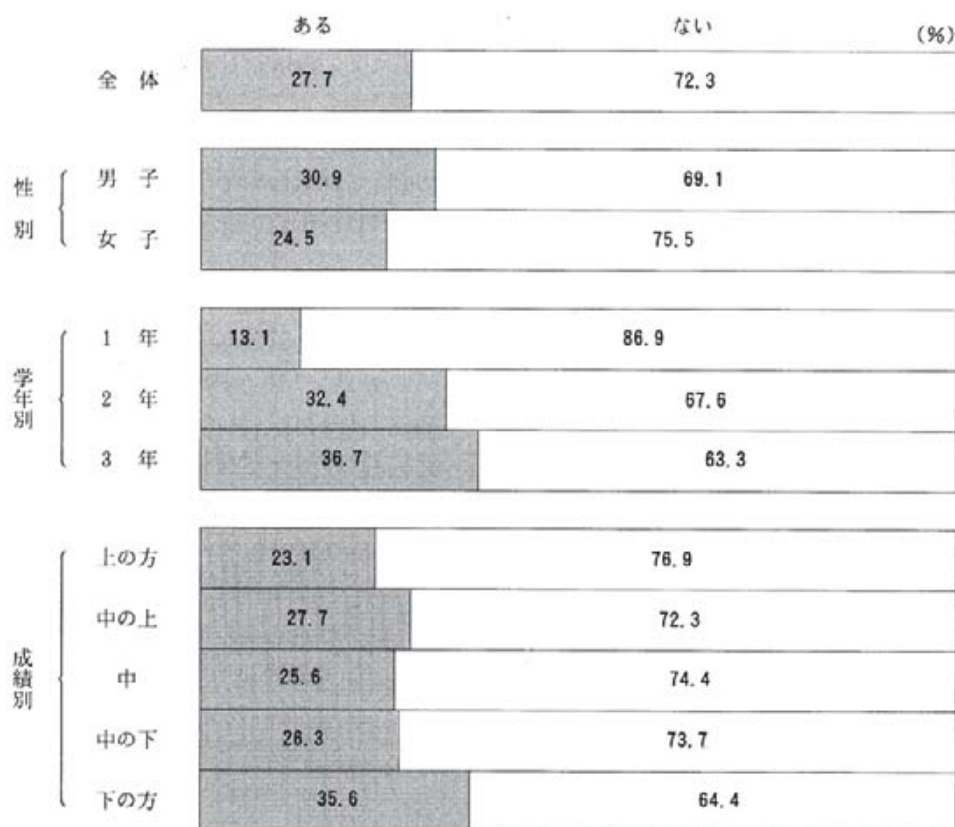
学期末7月時点であること、東京よりも人の出入りが少ない地方でのデータであることを考えると、盗難事件は地方でも少なくないことがわかる。

性別では、男子が30.9%に比して女子の方が24.5%と少ない。生徒をみていると、男子よりも女子の方が身の回りのものに関心を持ち、概してしっかりと管理しているように見受けられる。1年生が13.1%と1割台なのに、2年生になると32.4%と3割台に急上昇している。実に1年生の2.5倍に達し、3年生で

は36.7%になる。盗難事件は学年進行で増加することが明確に読み取れる。おそらく3学期末時点で調査したならば、3年生では4割台に達するのではないだろうか。

学年進行で盗難被害者が増加するのは、都心部の高校でも同様である。学校に在籍する期間が長いほど、盗難被害にあう機会が増加するということは、学校がやや無防備であるからだろうか。盗難が多い背景には、中学校と違って高校には、外来者の出入りなどが多いことや、被害が生徒指導部の係に届け出ら

図4-1 盗難経験 × 性・学年・成績——学年進行で増加する



れても、よほど多額、大量でない限り警察に被害届を出して、校舎内を徹底的に捜査してもらうなどということはなく、その結果、同一犯による犯行が度重なる場合があることなどが指摘されている。

一方で、生徒側も金銭感覚が変化したというべきか、物が豊富に手に入るようになったためか、持ち物に名前を書かなかつたり、財布やブランドもののラケットやシューズなどの高価な品物を教室内に置き放しにしたり、鍵をかけずにロッカーに入れておくなどの管

理のずさんさが指摘されよう。つまり生徒も無防備すぎるのである。

そして、成績別では、「下の方」の生徒が35.6%と、それ以上の成績者との間に1割近くの差がある。

次に、飲酒経験の有無を聞いたのが、表4-1である。「まったく飲まない」者が51.3%いるのに対して、「たまに飲む」者が39.0%で、よく飲む（週に1回くらい+しょっちゅう飲む）者は9.7%になる。国立療養所久里浜病院の鈴木健二医師らのグループによ

表4-1 飲酒経験 × 性・学年・成績——2年までに経験者が急増する

		(%)			
		まったく飲まない	たまに飲む	週に1回くらい飲む	しょっちゅう飲んでいる
全体		51.3	39.0	5.6	4.1
				9.7	
性別	男子	42.5	43.5	7.8	6.2
	女子	60.0	34.5	3.5	2.0
				14.0	
				5.5	
学年	1年	62.1	30.9	3.4	3.6
	2年	44.7	42.6	7.9	4.8
	3年	48.7	42.6	5.1	3.6
				7.0	
				12.7	
				8.7	
成績	上の方	38.5	51.6	7.7	2.2
	中の上	53.6	38.9	5.1	2.4
	中	51.9	39.7	5.0	3.4
	中の下	55.8	35.2	5.6	3.4
	下の方	45.0	39.7	7.4	7.9
				9.9	
				7.5	
				8.4	
				9.0	
				15.3	

る'93年の東京・神奈川・千葉・大阪など全国の9都府県の44校、1万4千人の調査では、飲まない（年に1～2回、1杯以下を含む）層は39.5%である。また、昨年調査した東京のある公立高校で「まったく飲まない」と答えた者は39.9%であった。これらに比べると、今回調査の4校の生徒の飲酒率はかなり低いといえる。その上、飲酒頻度の多い問題飲酒群の生徒も少ない。

性別では、「まったく飲まない」層が、男子42.5%に対し、女子は60.0%と圧倒的に多い。そして飲む層の度合いでも、よく飲む層の男子は女子の2.5倍に達している。先述の東京の公立高校で「まったく飲まない」層は、男子が38.7%、女子は41.4%であった。飲まない層の男子は、東京も地方もほぼ同率と考えてよいが、女子の場合には明確な差があることがわかる。都市部の女子高校生と比較して地方の女子高校生は、親の意識や家庭の規範、地域社会など周囲の目が男子の行動に対してより、まだ厳しい現実があるからであろう。生徒自身もそれを意識しているといえる。

学年別では、「まったく飲まない」層が、1年生で62.1%いるのに対して、2年生では44.7%と急減していることがわかる。これは入学後の高校生活の中で、部活動や体育祭、文化祭などの学校行事を経験するたびに、コンパなどの飲酒機会が増加していることが背景にある。その中で先輩やクラスメートに勧められて飲み始めた者が多かったといえる。

成績別では、下位層の飲酒経験率が高いであろうことは予想できたが、上位層の飲酒経験率が最も高かったのは予想外であった。ただし、飲酒頻度では上位層に「たまに飲む」

者が多いのに対して、下位層ではよく飲んでいる生徒の率が高いのが特徴である。

また、多くの学校で生活指導の事例の多い、喫煙の有無を問うたのが表4-2である。「まったくすわない」者が91.2%、「たまにすう」者が3.9%、よくすう（週に1回くらい+しょっちゅうすっている）者は4.9%である。喫煙経験者は飲酒経験者に比べると非常に少ないことがわかる。先述の東京の公立高校でも非喫煙者は88.4%に達しているので、地方も大都市も大差がないことがわかる。ただし、1割弱の喫煙経験群についてながめるとよくすっている生徒の多いことが気にかかり、タバコの常習性が強いことがわかる。

性別では、非喫煙者の割合が男子は84.1%であるが、女子は男子よりも1割以上も多い98.2%に達し、顕著な差がみられる。女子の喫煙経験者は少数であり、よくすう生徒はまれであることがわかる。

学年別では、非喫煙者が1年生で92.3%、2年生で91.0%、3年生で90.4%と学年進行で若干減少しているが、飲酒経験のように2年生で急増するという明確な特徴は認められない（表4-1）。喫煙は、高等学校での生徒文化を経験する中で、特に機会が増加するわけではないことが読み取れる。多くの生徒たちが参加するコンパなどで飲酒経験が増加することはあっても、喫煙まで始める生徒はごく少数なのであろう。事実、喫煙指導にともなう生徒指導で事情を尋ねると、中学生時代からすっていたと答える者が多いが、今回のデータはそれを裏づけているといえる。成績別では、下位者の喫煙経験率が高く、特によくすっている割合も高いことがわかる。

表4-2 喫煙経験 × 性・学年・成績——性差が顕著である

(%)

		まったく すわない	たまにすう	週に1回くらい すう	しょっちゅう すっている
全体		91.2	3.9	0.7	4.2
				4.9	
性別	男子	84.1	6.6	1.1	8.2
	女子	98.2	1.2	0.2	0.4
				0.6	
学年	1年	92.3	3.9	0.3	3.5
	2年	91.0	3.8	0.8	4.4
	3年	90.4	4.0	0.8	4.8
				5.6	
成績	上の方	92.3	2.2	0.0	5.5
	中の上	93.5	3.8	0.5	2.2
	中	93.1	3.3	0.6	3.0
	中の下	92.7	3.2	0.9	3.2
	下の方	84.7	6.1	0.5	8.7
				9.2	

○は最大値

2. 逸脱経験と規範意識

盗難や飲酒機会が増大する中で、高校生たちはどのような生活態度をとり、どのような規範意識を形成しているのだろうか。ここではその点を探ってみたい。

図4-2は、近年気になっているいくつかの逸脱行為についての経験の有無を問うたものである。全体には、予想以上に逸脱行為は少なく、データからはまじめな高校生像が浮かんでくる。地方の方が首都圏より親や地域

社会の規制が強く、そうした環境の中で高校生自身も自己規制しているのかもしれない。「学校が禁止している服装やヘアスタイルで登校する」生徒が「何度もある」「ときどきある」を合計して22.8%と、やっと2割を超えるくらいである。他の行為をよくする者は1割にも満たない。特に、「授業に出ないでサボっている」という中抜け行為が少ない。地方の生徒の真面目さなのか、それとも自由

図4-2 逸脱経験——服装やヘアスタイル以外は少ない



選択を大幅に認めていないカリキュラム編成などとの関連なのだろうか。

逸脱行為の多い（何度も＋ときどきある）生徒を属性別にみたのが、表4-3である。性別では、服装、ヘアスタイルの逸脱経験（男子18.0%＜女子27.5%）以外は男子の方が圧倒的に多いことがわかる。「クラスメートに暴力をふるう」は6.9倍、「バイクに乗る」は5.7倍、「無断で外泊する」が4.2倍に達する。ファッションで自己主張をしようというのは、どこの女子高校生でも、程度の差はあるが同じであるといえる。

学年別では、1年生よりも上級生の2・3年生が多い。ただし、無断欠席や中抜けなどを除くと、必ずしも学年進行で上昇するわけではない。

成績別では、上位者と下位者に逸脱行為をよくする者が特に多いことが読み取れる。下位者に逸脱行為が多いということは予想通りであったが、上位者がそれに次いで多いということは予想外であった。特に暴力行為が最大値を示しているのは驚きである。上位者の

数が全体の5%弱と少ないので、データの偏りも否定できないが、後述の規範意識でも同様の傾向を示しているのも、まだあまり表面化してはいないものの、今後注目する必要があると思われる。

ところで、逸脱行為と密接に関係するのが規範意識の形成である。そこで、生徒たちに10項目の行為について「高校生としてどのくらい悪いか」と許容度を尋ねたのが、図4-3である。明確に悪い行為だと思っている（とても＋かなり悪い）生徒と、悪くない行為だと思っている（あまり＋まったく悪くない）生徒に分けてながめると、10項目全てに「悪い行為」と思っている生徒が多いことがわかる。

この中で、「パチンコをする」（悪い39.5%＞悪くない38.9%）、「友人同士で酒を飲む」（悪い37.6%＞悪くない36.9%）の2項目だけは、否定派と肯定派がほぼ拮抗している。生徒の半数が飲酒経験者であることなどを考慮すると、この2つの行為は、生徒たちに肯定されている度合いが高いといえよう。

表4-3 逸脱経験 × 性・学年・成績——成績上位者と下位者が多い

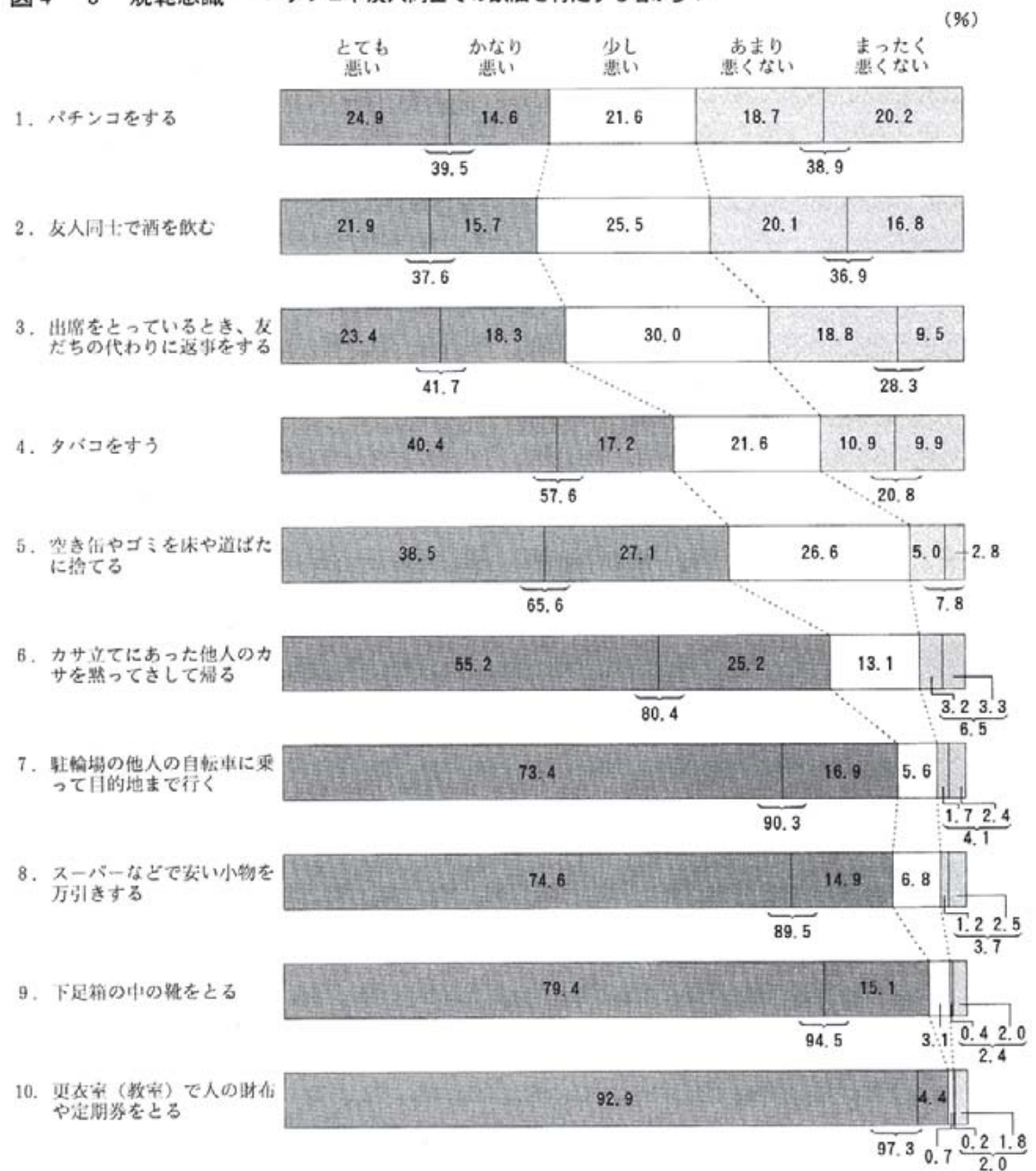
	(%)									
	性別		学年			成績				
	男子	女子	1年	2年	3年	上の方	中の上	中	中の下	下の方
1. 学校が禁止している服装やヘアスタイルで登校する	18.0	< 27.5	22.4	< 23.4	> 22.5	28.6	21.1	20.0	25.1	25.8
2. 無断で外泊する	12.7	> 3.0	6.7	< 8.8	> 7.8	12.1	4.0	7.1	5.6	14.6
3. バイクに乗る	10.9	> 1.9	3.6	< 8.1	> 7.0	9.3	3.6	4.4	5.4	13.0
4. 学校を1日サボる	5.5	> 3.5	1.7	< 4.7	< 7.3	7.7	2.4	3.8	3.4	8.7
5. 授業に出ないでサボっている	6.1	> 2.8	1.3	< 4.9	< 7.0	6.6	3.3	3.1	4.6	7.6
6. クラスメートに暴力をふるう	4.8	> 0.7	2.2	< 2.3	< 4.0	8.8	1.4	1.3	3.2	5.0

「何度も」＋「ときどき」ある割合
○は最大値

しかし、「更衣室（教室）で人の財布や定期券をとる」（悪い97.3%、以下同じ）、「下足箱の中の靴をとる」（94.5%）、「スーパーなどで安い小物を万引きする」（89.5%）、「駐輪場の他人の自転車に乗って目的地まで行く」（90.3%）、「カサ立てにあった他人の

カサを黙ってさして帰る」（80.4%）などの窃盗や万引きといった明らかな犯罪行為については明確に否定している。パチンコや飲酒を肯定し始めるなど、生徒は変わりつつあるが、基本的な規範感覚は依然強く持っているといえよう。

図4-3 規範意識——パチンコや友人同士での飲酒を肯定する者が多い



次に、属性別に規範意識の度合いをみたのが、表4-4である。性別では、全項目にわたって、男子が悪くないと思っている割合が高い。つまり、女子の方が強い規範意識を持っていることがわかる。特に、「パチンコ」「飲酒」「喫煙」などは10%以上の差がある。前述の、表4-1や表4-2からわかるように、飲酒、喫煙体験が圧倒的に男子に多いことが背景にあるといえる。さらに、パチンコと飲酒を悪いと思っているのも男子生徒の方が少なく、それぞれ31.3%、31.7%にすぎない。逸脱行為の有無と規範意識の形成とは密接に関連していることが、この数値からもわかる。

学年別では、パチンコや友人同士での飲酒、喫煙を除くと、学年進行で規範意識が低下するわけではない。パチンコや友人同士での飲酒は、学年が進行するにつれ、生徒文化を経験する機会が増加することが背景にあるといえよう。

成績別では、成績の下位者が規範意識が弱い。飲酒、喫煙をよくする割合が一番多く、「友人同士で酒を飲む」「タバコをすう」ことを容認している結果であろう。ただし、成績の上位者が下位者に次ぐか、下位者以上に「悪くない」と思っている者がいたことが驚きであった。中でも、窃盗や万引きといった明らかな犯罪行為に高い数値が示されているのに注目したい。特に、「下足箱の靴をとる」「更衣室（教室）で人の財布や定期券をとる」の2項目は、他のクロス集計と比較しても抜きん出て高い。

すでに見てきたように、逸脱行為の経験率で高い数値が成績の上位者に出ているのであるから、規範意識が低いのは当然かもしれない。かつてのように問題行動に縁のない真面目な高校生像と成績上位者が概して重なるという時代ではなくなったのだろう。そうした中で今後の教育を考えると、生徒たちのスト

表4-4 規範意識 × 性・学年・成績——成績上位者と下位者が弱い

	(%)									
	性別		学年			成績				
	男子	女子	1年	2年	3年	上の方	中の上	中	中の下	下の方
1. パチンコをすする	45.9	32.0	34.2	35.6	48.0	39.6	36.5	36.5	38.4	46.9
2. 友人同士で酒を飲む	45.7	28.3	29.6	38.6	42.3	38.5	36.0	31.9	37.1	46.6
3. 出席をとっているとき、友だちの代わりに返事をする	32.4	24.1	28.7	28.6	27.5	36.3	25.8	26.6	27.2	33.6
4. タバコをすう	27.4	14.3	18.3	19.9	24.6	24.2	18.8	17.9	19.2	29.2
5. 空き缶やゴミを床や道ばたに捨てる	11.1	4.6	9.2	7.7	6.6	8.8	6.5	6.2	7.0	12.7
6. カサ立てにあった他人のカサを黙ってさして帰る	10.0	3.1	6.8	5.3	7.8	11.0	5.1	6.0	6.3	8.2
7. 駐輪場の他人の自転車に乗って目的地まで行く	6.6	1.5	4.9	3.3	4.2	8.8	2.9	3.3	4.1	5.5
8. スーパーなどで安い小物を万引きする	5.3	2.1	3.9	2.2	5.4	8.8	3.2	1.9	3.9	6.0
9. 下足箱の中の靴をとる	3.4	1.3	2.9	1.8	2.5	6.6	2.2	1.9	2.1	2.9
10. 更衣室（教室）で人の財布や定期券をとる	2.8	1.1	2.6	1.2	2.3	6.6	1.6	1.6	2.1	1.9

「あまり」+「まったく」悪くない割合
 >は10%以上の差
 ○は最大値

レスを取り除くためのカウンセリングや、頭でっかちの人間を作らないための人間的修養を深めさせる工夫が必要なのかもしれない。

次に、表4-5で、生徒たちの容認度が高かったパチンコと友人同士での飲酒について悪い(とても+かなり悪い)と思う否定派と悪くない(あまり+まったく悪くない)と思う肯定派に分けて、部活動と進路別特徴を示した。部活動別では、運動部に所属している生徒は熱心に活動している者や、あまり熱心に活動していない者も共にパチンコや友人同士での飲酒に肯定的である。一方、文化部に所属している生徒は熱心に活動している者も、

あまり熱心に活動していない者もともに否定的な者が多い。つまり、文化部に所属している生徒の方が、運動部に所属している生徒よりも規範意識が強い。

進路別では、「やさしい4年制大学」と「就職」志望者に肯定的な者が多い。「短大」と「超難関4年制大学」志望者には否定的な者が多く、規範意識が強いといえる。平易な大学志望者は努力して一歩上を狙うことをせず、入れそうな大学を志望している者が多く見受けられ、生活態度もやや安易で、その分、規範意識も弱いということなのであろうか。

表4-5 パチンコ・友人同士の飲酒 × 部活動・進路——運動部は肯定派、文化部は否定派

(%)

		部活動							
		心運動部で熱	熱心運動部で不	心文化部で熱	熱心文化部で不	いた以前入って	が入ったこと		
1. パチンコをすす	悪い	38.0	38.7	49.8	42.4	34.7	41.7		
	悪くない	38.7	41.7	33.9	32.6	43.9	37.1		
2. 友人同士で酒を飲む	悪い	36.1	34.1	44.1	45.1	34.9	38.2		
	悪くない	38.0	40.5	31.8	25.6	40.4	36.9		
		進路							
		制超難関4年	大学難関4年制	制普通の4年	年やさしい4	短大	学校専修・専門	就職	その他
1. パチンコをすす	悪い	45.1	40.9	37.7	32.1	46.9	38.2	32.0	29.5
	悪くない	37.8	38.0	39.7	54.1	28.5	39.7	48.0	43.6
2. 友人同士で酒を飲む	悪い	45.2	34.0	36.8	33.9	45.2	38.5	32.0	32.3
	悪くない	36.9	36.3	38.3	44.8	23.5	36.0	46.0	50.0

悪いは、「とても」+「かなり」悪い割合
 悪くないは、「あまり」+「まったく」悪くない割合
 <は10%以上の差

3. 飲酒・喫煙経験者の意識と行動

ところで、現場で飲酒・喫煙に関する生徒指導を行っている、指導の対象となる生徒の規範意識の低さや、逸脱行為の多さは、他の一般の生徒と違うのではないかと感ずることがしばしばあった。

表4-6は、飲酒・喫煙経験と逸脱行動をよくする（何度も+ときどきある）生徒との

クロス集計である。まず、飲酒や喫煙の度合いが高くなるにしたがって、逸脱行為をよくする生徒の割合が増大している。「まったく酒を飲まない」生徒と「まったくタバコをすわない」生徒の逸脱行動は、全項目で平均以下であり、かなり少ない。一方、飲酒経験者では、「週に1回くらい飲む」と「しょっ

表4-6 逸脱経験 × 飲酒経験・喫煙経験——飲酒・喫煙経験の度合いと逸脱経験の多さは正比例している

	飲酒経験				喫煙経験		
	まったく飲まない	たまに飲む	週に1回くらい飲む	しょっちゅう飲んでいる	まったくすわない	たまにすう	週に1回くらいすう+しょっちゅうすっている
1. 学校が禁止している服装やヘアスタイルで登校する	18.3 <	25.2 <	34.2 <	39.5	21.4 <<	32.5 <	40.2
2. 無断で外泊する	3.2 <	9.4 <<	22.3 <	30.8	5.4 <<	26.0 <<	39.2
3. バイクに乗る	1.6 <	8.5 <	18.4 <	27.9	3.5 <<	20.8 <<	44.2
4. 学校を1日サボる	2.2 <	4.7 <	12.5 <	22.2	3.3 <<	14.5 <	20.6
5. 授業に出ないでサボっている	1.6 <	5.2 <	12.5 <	22.2	2.6 <<	15.8 <<	27.8
6. クラスメイトに暴力をふるう	1.9 <	2.8 <	3.6 <<	13.6	1.8 <	7.8 <	14.4

「何度も」+「ときどき」ある割合
 <は10%以上の差
 ○は各尺度の最大値

ちゅう飲んでいる」生徒の逸脱経験が多い。喫煙では経験者の方が圧倒的に多い。特に、飲酒と喫煙をよくしている（週に1回くらい＋しょっちゅうしている）生徒の逸脱行為の経験率は高く、飲まない者やすわない者と比べると「バイク乗車」「無断外泊」「授業の中抜け」などの行動で10倍以上の差がある。さらに、飲酒と喫煙で比較すると、喫煙をよくする生徒の方がより逸脱行動が多いことがわかる。

次に、飲酒・喫煙経験と規範意識との関係を見たのが表4-7である。ここでも飲酒・

喫煙経験の度合いが高くなるにしたがって、規範意識が急激に低下していていることがわかる。「まったく飲まない」生徒と「まったくすわない」生徒の肯定率は、全項目について平均以下である。逆に、飲酒・喫煙経験者の肯定率は平均をかなり上回る。特に、飲酒・喫煙をよくする生徒の肯定率は高く、パチンコや友人同士での飲酒や喫煙は5割以上である。つまり、教師や親は未成年者だから悪いことだと注意するが、彼ら自身の多くは自分たちの行動は悪いことだと思っていないことをこの数値は示している。そして、窃盗

表4-7 規範意識 × 飲酒経験・喫煙経験——飲酒・喫煙経験者の規範意識は大変低い

	飲酒経験				喫煙経験		
	まったく飲まない	たまに飲む	週に1回くらい飲む	しょっちゅう飲んでいる	まったくすわない	たまにすう	週に1回くらいしょっちゅうすっている
1. パチンコをする	28.1	49.2	54.0	56.8	36.3	64.0	69.1
2. 友人同士で酒を飲む	20.3	50.9	70.2	67.9	33.8	61.8	77.1
3. 出席をとっているとき、友だちの代わりに返事をする	24.1	31.3	37.8	38.3	26.9	39.5	45.4
4. タバコをすう	13.1	26.5	31.5	48.2	17.2	46.0	69.1
5. 空き缶やゴミを床や道はたに捨てる	5.9	9.1	9.0	18.5	6.5	18.2	23.7
6. カサ立てにあった他人のカサを黙ってさして帰る	5.0	6.8	13.5	14.8	5.2	18.4	21.6
7. 駐輪場の他人の自転車に乗って目的地まで行く	3.2	3.8	9.9	9.9	3.1	11.7	15.5
8. スーパーなどで安い小物を万引きする	2.5	4.7	2.7	11.3	3.2	6.5	10.3
9. 下足箱の中の靴をとる	1.9	2.4	4.5	4.9	2.1	3.9	5.2
10. 更衣室（教室）で人の財布や定期券をとる	1.8	2.1	2.7	2.5	1.8	3.9	3.1

「あまり」＋「まったく」悪くない割合
 <<は10%以上の差
 ○は各尺度の最大値

や万引きといった明確な犯罪行為についても、平均より2倍以上も肯定率が高いというのは気にかかることである。また、飲酒と喫煙をよくする生徒を比べると、喫煙をよくする生徒の方が全項目にわたって肯定率が高い。これは逸脱行為の多さの比較と同一傾向を示している。

「たかがコンパでの飲酒くらいいいじゃないか！」という風潮は生徒はもちろん、保護者の中に見受けられるようになった。しかし今回のデータからは、飲酒や喫煙経験の増大は逸脱行為の増加や規範意識の低下につながるものの危険性を感じる。今後とも、機会があるたびに、生徒にも保護者にも飲酒と喫煙の問題点を指摘し、注意を喚起していく必要がある。

4. 社会とのかかわり

最近の高校生たちは、社会とどのような形で、どのようにかかわりを持っているのだろうか。ここではボランティア活動を通して探ってみた。近年、高校生の社会参加を勧め、社会性を高めようとの視点からボランティア活動は積極的に奨励されている。

まず、図4-4で活動経験の実態をみてみよう。ボランティア活動の経験者は29.4%と3割にすぎない。性別では、女子の方がやや経験が多い。学年別では、2年生が15.5%と少なく、3年生では47.0%とほぼ半数が体験している。

どんなボランティア活動をしたのかを自由に記述してもらったものをみると、高校生のワークキャンプへの参加など個人の意志で活動している例もあるが、学校の周辺地域の草取りやゴミ拾い、老人ホームや養護学校での手伝いなど学校が主催するものが多い。3年生の活動体験率が5割を占める背景には、学校行事の一貫として、3年生に主体的に参加

させているところもあるからであろう。成績による差は認められない。

では、生徒たちはボランティア活動にどの程度関心を持っているのだろうか。図4-5によれば、関心のある（とても+かなりある）生徒が17.0%にすぎないのに対して、関心のない（あまり+まったくない）生徒は46.3%にのぼる。かなり声高に奨励されているにもかかわらず、関心度は高いといえない。

図4-6は属性別にみたものである。性別では、男子に対して女子の関心度が高い。学年別では、活動体験の最も少ない2年生が関心度も一番低い。ボランティア活動がもっと活発化することの必要性を強く感じる。それは、高校生の人間性や品性を高める上でも有効だからである。ただし、半ば強制された学校通しのボランティア活動から、個人の自発的意志で参加するボランティア活動への質的転換と広がりが今後の課題となる。

図4-4 ボランティア活動の経験 × 性・学年——約3割が活動経験者

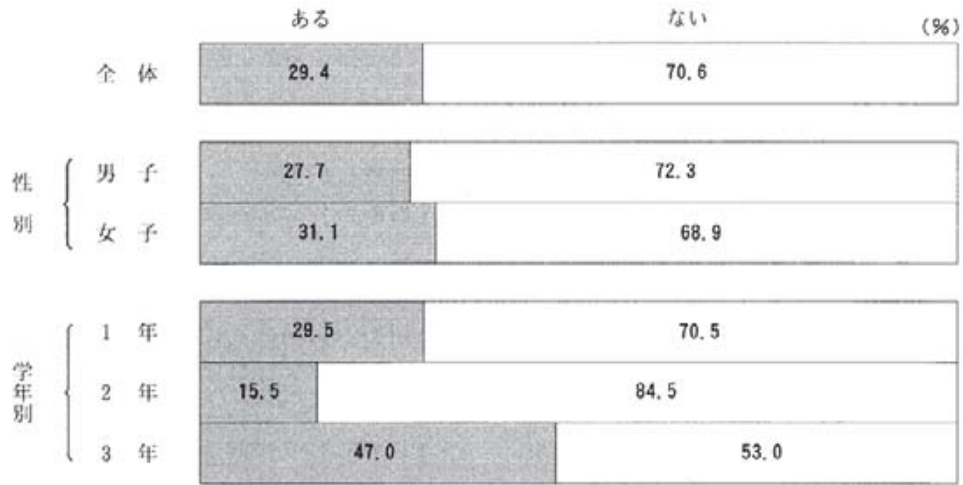


図4-5 ボランティア活動への関心度——高くない

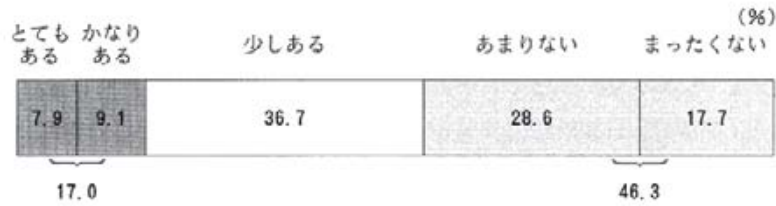
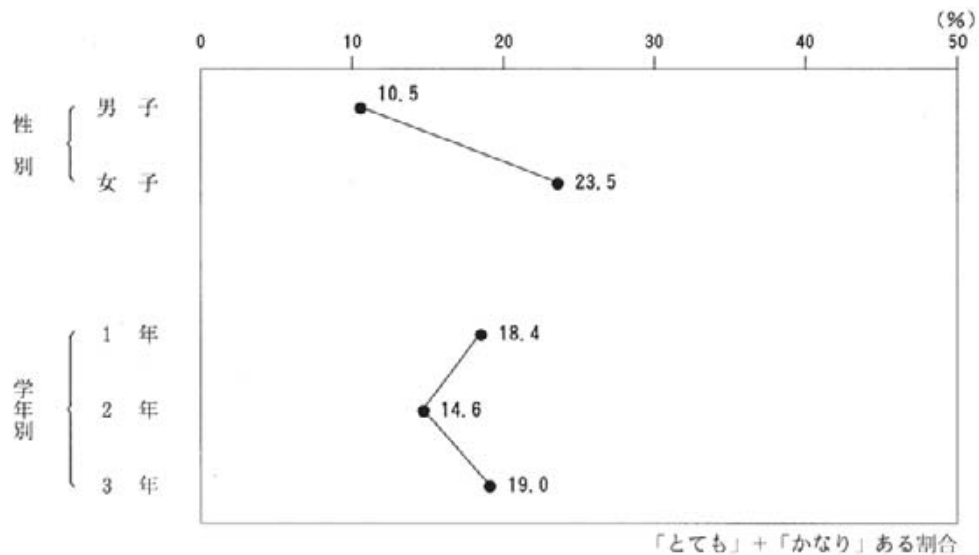


図4-6 ボランティア活動への関心度 × 性・学年——女子がやや高い



最後に、社会的体験を豊かにするもの1つである外国旅行の経験をみてみよう。図4-7から、高校生の23.8%が外国旅行の経験者であることがわかる。10年前にはこれほど多くの者が経験していたとは思えない。社会が豊かになってきたことと、子どもにも積極的に外国体験をさせようという親の意識の変化もあるだろう。性別では、まったく差がない。学年別では、3年生で43.7%と4割強に達し、近年、修学旅行に外国へ行く高校も増

えている。

次に、外国旅行経験者に「何回行ったか」を尋ねたのが図4-8である。「1回行った」が72.6%、高校生になってから「1回行った」が93.7%を占めている。「2回以上」の体験を持つ生徒はごく僅かにすぎない。今後、外国に行く者がさらに増加し、回数も増えれば、生徒たちの社会を見る目が豊かになり、外国の人々をもっとよく理解できるようになるのではないだろうか。

図4-7 外国旅行経験 × 性・学年——3年では4割強

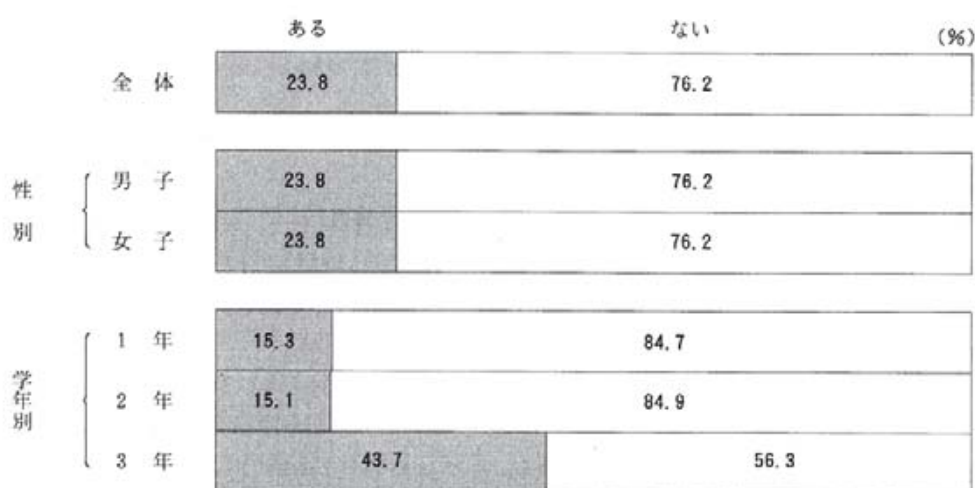


図4-8 外国旅行の回数——8割弱が1回

